

Essay

Sapiarc.com

2009年5月19日(2009-10)

オバマ大統領のノートルダム大学卒業式演説について

4月10日と5月1日の「ひとこと」に、オバマ大統領が5月17日にノートルダム大学の卒業式に出席して演説を行うことに関連して、いろいろな問題が起きていることについて書きました。今回はその続きです。

5月18日付けのニューヨーク・タイムズ、ワシントン・ポスト、ロサンゼルス・タイムズに掲載された、オバマ氏の卒業式演説についての記事を読みました。少しずつニュアンスの違いはありますが、3紙ともオバマ氏の演説が聴衆の多くに好意的に受け取られ、良い印象を残したことを伝えています。

当日までの約1週間にわたって、ノートルダム大学の正門及びその周辺では抗議デモが毎日行われ、道路にはオバマ来学を非難する立て看板が並んでいました。また、中絶反対の横断幕を引っ張る小型飛行機が日に何回も大学の上空に飛来しました。当日、大学に入ろうとした約40人が逮捕されるということも起きました。しかし、結局、オバマ氏の卒業式演説は大学側が計画したとおりに行われたのです。

演説が行われた場所は、大学キャンパス内のジョイス・センター・バスケットボール試合場で、ここに約2,900名の卒業生とその家族、教職員ら約12,000名が集まりました。オバマ氏の登壇は長い喝采で迎えられ、演説の途中で「赤ん坊殺し」などと叫んだ男は聴衆のブーイングを受けて退場させられるなど、演説は聴衆の好意的な反応の

なかで行われました。例の“Yes, we can”や“We are N.D.”の連呼も出ました。

(N.D.はNotre Dameのことで、“We are N.D.”はアメリカンフットボールの試合を応援するときの元気付けに使われるようです。)

オバマ氏は演説時間のほとんどを中絶問題に使ったようですが、中絶の善悪を論じたのではなく、この問題についてアメリカ国民の意見が大きく分かれている現状を考慮して、開かれた心と頭と公正な言葉(open heart, open mind, fair-minded words)によって、共通の議論の場(common ground)を作ることを主張しました。また、相手方を悪魔であるかのように言って(demonize)非難し合うことを止めるよう求めました。

そして、皆が協力し合うことにより、中絶を望む女性の数を減らし、望まれない妊娠を減らし、養子縁組を増やそうではないかと呼びかけました。また、中絶に反対している人々の良心を尊び、(法律に)意味のある良心条項(a sensible conscience clause)を書き入れることを提案しました。

オバマ氏がこういう呼びかけをするときのモデルになる人物がいたようです。それは、シカゴ地区で長い間カトリックの枢機卿を務めた故ジョセフ・バーナディン卿(Cardinal Joseph Bernadin)で、オバマ氏は、バーナディン卿があらゆる難しい問題について人々と同じレベルで静かに話し合っていて、共通の場を見つけるよう努力したこ

とを語りました。

演説の後で、ノートルダム大学長のジョン・ジェンキンス神父は、オバマ氏が自らと見解を異にする多くの人たちが居るノートルダム大学に来て卒業式演説を行ってくれたことに感謝し、異なる意見を持っている人たちとの対話をいとわないオバマ氏を褒めました。新聞は、オバマ氏が難しい問題から逃げない姿勢を明確にしたことを評価する有識者が多いことを伝えています。

アメリカは昨年来の経済危機の最中にありますが、それにも拘わらず、こういう問題をやり過ぎと言ってもよいほど熱心に議論する人々が居て、またそれに応える演説をする大統領が居るのです。これは、アメリカが世界のリーダーとしての役割を担うだけのエネルギーをまだ失ってはいないことを示すものではないでしょうか。（おわり）